

総論

第1章 世界の最高水準に達した我が国の平均寿命

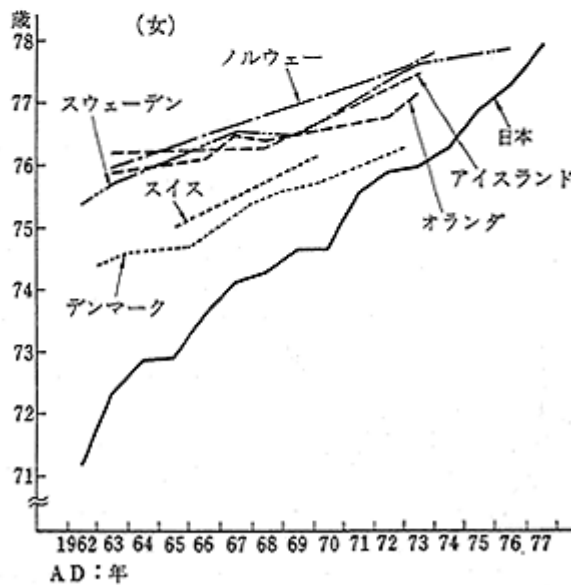
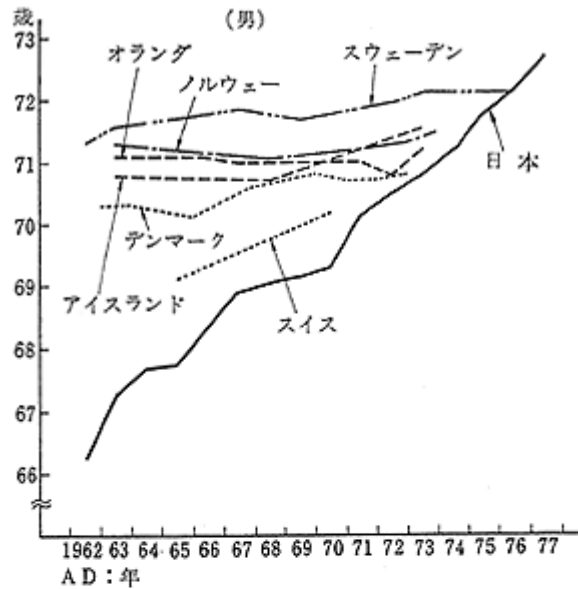
第1節 我が国の平均寿命と諸外国との比較

1 平均寿命の現状と推移

52年の我が国の平均寿命(0歳における平均余命)は、男子72.69年、女子77.95年となり男女とも世界の最高水準に達した。すでに男子については、前年の51年に72.15年となり、それまで世界の最高水準と言われていたスウェーデンの72.12年を追い越したところである。他方、女子については、スウェーデンは51年に77.90年であり52年の生命表が作成されていないので確定的ではないが、最近の両国の伸びの速度を勘案すればスウェーデンとほぼ同列になったと思われる(第1-1図)。

第1-1図 世界各国の平均寿命の年次推移

第 1-1 図 世界各国の平均寿命の年次推移



資料：厚生省統計情報部「簡易生命表」、「完全生命表」
 UN「Demographic Year book」
 スウェーデンは「Defolkknings förändringar 1976」

男子が70年,女子が75年を超える長寿国としては,我が国,スウェーデンに次いで,デンマーク(70.8年,76.3年-1972~73年),オランダ(71.2年,77.2年-1971~72年),ノルウェー(71.50年,77.83年-1973~74年),アイスランド(71.6年,77.5年-1971~75年)及びスイス(70.29年,76.22年-1968~73年)がある。

平均寿命の男女差をみると,ほとんどの国で女子が長くなっているが,我が国の男女差5.26年は欧米諸国と比較すると小さく,アメリカ(白人)は7.8年も女子が長命になっている。

諸外国の平均寿命の推移をみると,以前からかなり長命であった欧米諸国では伸びが緩やかである。スウェーデンは,我が国が男子61.9年,女子65.7年であった時(1953年)に,男子70.49年,女子73.43年(1951年~55年)と我が国よりも8年程度長命であったが,その後の期間については年平均の伸びは男子約0.1年,女子約0.2年である。他の欧米諸国についても総体的に,スウェーデンとほぼ同様な推移となっている。それに対して,我が国の同期間の伸びは年平均男子約0.5年・女子約0.6年という驚異的な伸びを示している。しかも男子については,1965年前後に,女子については,1975年前後に,欧米諸国の水準に達した後もその伸びは鈍化せず,伸び続けてきた。

厚生白書(昭和53年版)

(C)COPYRIGHT Ministry of Health , Labour and Welfare

総論

第1章 世界の最高水準に達した我が国の平均寿命

第1節 我が国の平均寿命と諸外国との比較

2 死因の国際比較

欧米諸国の死因構造をみると、我が国と同様に成人病の占める割合が圧倒的に高く、人口高齢化が進んでいることを反映して、スウェーデンでは「悪性新生物」、「心疾患」、「脳血管疾患」の三大死因の占める割合が71.0%で、我が国の57.7%をはるかに上回っている。他の諸国においても60%を超える所は多く、多くの国で、第1位「心疾患」、第2位「悪性新生物」、第3位「脳血管疾患」となっており、我が国の第1位「脳血管疾患」、第3位「心疾患」という死因構造と対照をなしている(第1-1表)。

第1-1表 主要三大死因の国際比較(全死亡に対する割合)

第 1-1 表 主要三大死因の国際比較(全死亡に対する割合)(1974年)

(単位 %)

	日 本	アメリカ	オーストリア	フランス	西ドイツ	イタリア	ノルウェー	スウェーデン	イングランド・ウェールズ	オーストラリア
主要三大死因の計	57.7	66.9	63.8	54.0	61.6	61.1	65.8	71.0	66.3	66.0
脳血管疾患	25.1	10.7	15.1	13.9	14.4	13.9	15.1	11.0	13.5	14.1
悪性新生物	18.8	18.6	20.7	21.0	20.5	19.9	18.6	22.2	20.8	17.2
心疾患	13.8	37.5	28.0	19.1	26.7	27.3	32.1	37.8	32.0	34.6

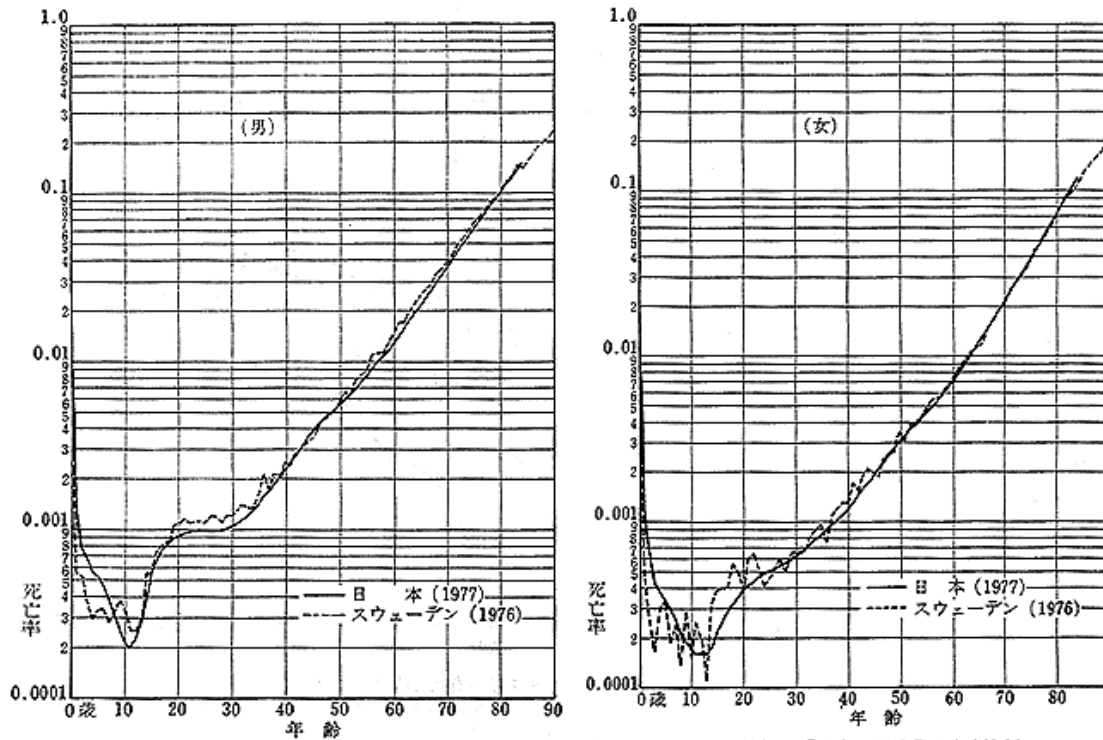
資料：厚生省統計情報部「人口動態統計」

WHO「World Health Statistics Annual Vol. I, 1976, 1977」

特に長寿国として、我が国と同程度にあるスウェーデンについてその死因構造をもう少し詳細にみると、乳幼児期では男女とも死亡率はスウェーデンが低くなっており、死因別でみると、乳児の最大死因である「周産期疾病及び死亡の主要原因(未熟児・無酸素症、胎児の異常などが含まれる。)」では我が国が高く、2位の「先天異常」では我が国の方が1~4歳の男子を除いてはやや低く、肺炎・気管支炎等を含む「呼吸器系の疾患」では我が国の方がかなり高くなっている。10歳以上の死亡率については男子では我が国の方が低くなっているが、女子では全体的に若干我が国の方が高くなっており、死因別でみると、15~24歳では、男女とも「新生物」で、55~64歳では、男子で「新生物」、女子で「循環器系の疾患」が、我が国の方が高くなっている(第1-2図,第1-3図)。

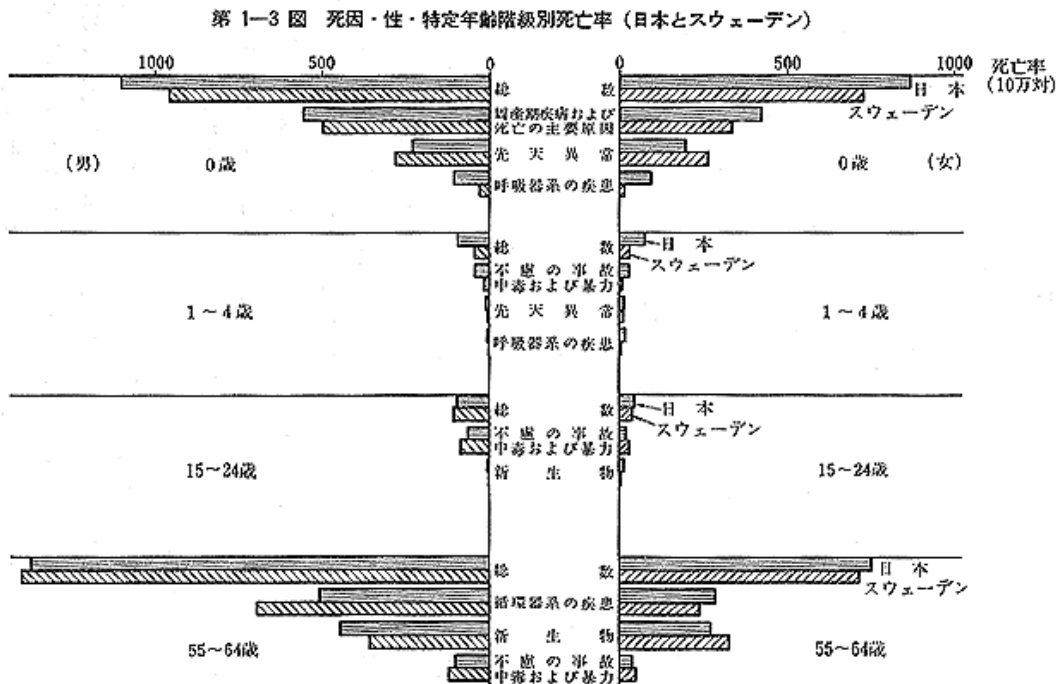
第1-2図 死亡率の比較

第1-2図 死亡率の比較(日本とスウェーデン)



資料：厚生省統計情報部「昭和52年簡易生命表資料」

第1-3図 死因・性・特定年齢階級別死亡率(日本とスウェーデン)



資料：WHO「World Health Statistics Annual Vol I, 1977」

このように、スウェーデンと比較して、我が国で高くなっている死因については、今後の改善が可能な死因として、今後の我が国の平均寿命の一層の伸長の可能性を追求することが必要であろう。

総論

第1章 世界の最高水準に達した我が国の平均寿命

第2節 我が国の平均寿命

1 平均寿命の年次推移と現状

我が国の平均寿命は、明治24~31年の第1回生命表によると男42.8年、女44.3年、昭和10~11年の第6回生命表によると男46.92年、女49.63年と、50年以下の時代が長く続いたが、第8回生命表(昭和22年)では、男子50.06年、女子53.96年と早くも戦前の水準を超え、その後も急速な伸長を続け、男子では、26年簡易生命表によれば60年を、34年には65年を超え、46年には遂に70年を突破した。一方、女子では、男子より一層早い速度で伸長し、25年簡易生命表では60年、27年には65年、35年に70年を超え、さらに、46年には75年を超えた。

男女差は第6回生命表で2.71年であったものが、52年には5.26年に拡大している。

最近5年間の平均寿命の伸長速度をみると、年平均男子で0.44年、女子で0.40年の伸びとなっている。今後、この伸長速度が鈍化するとしても他の長寿国の伸長動向からして、世界の長寿国の一員であり続けられると思われる。

このような驚異的な平均寿命の伸びは、国民全体の衛生水準の向上により、全年齢層にわたって死亡率が低下したことによってもたらされたものであるが、第6回生命表と52年簡易生命表の死亡率を比較すると、0歳および20歳前後の低下が特に著しく、戦後の急速な寿命の伸長は主として乳児死亡率の低下と結核の防圧を中心とする感染性疾患による死亡の減少に負っている所が大きいことがうかがわれる。

さらに詳細にみると、平均寿命の年次ごとの伸長の大きさに変化がみられる。31年および32年の男子は前年より短くなっており、他の年次でも、37年、40年、45年、48年で伸びが小さくなっている(第1-2表)。これらの年はいずれもインフルエンザの流行年になっており、インフルエンザ流行に伴って肺炎、気管支炎等の死亡が増加している。

第1-2表 平均寿命の推移

第1-2表 平均寿命の推移

	男		女		男	女
	男	女	男	女		
明治24~31年* (1891~1898)	42.8	44.3	34	('59)	65.21	69.88
32~36* (1899~1903)	43.97	44.85	35*	('60)	65.32	70.19
42~大正2*(1909~1913)	44.25	44.73	36	('61)	66.03	70.79
大正10~14* (1921~1925)	42.06	43.20	37	('62)	66.23	71.16
15~昭和5*(1926~1930)	44.82	46.54	38	('63)	67.21	72.34
昭和10~11* (1935~1936)	46.92	49.63	39	('64)	67.67	72.87
20 ('45)	23.9	37.5	40*	('65)	67.74	72.92
21 ('46)	42.6	51.1	41	('66)	68.35	73.61
22* ('47)	50.06	53.96	42	('67)	68.91	74.15
23 ('48)	55.6	59.4	43	('68)	69.05	74.30
24 ('49)	56.2	59.8	44	('69)	69.18	74.67
25~27* (1950~1952)	59.57	62.97	45*	('70)	69.31	74.66
26 ('51)	60.8	64.9	46	('71)	70.17	75.58
27 ('52)	61.9	65.5	47	('72)	70.50	75.94
28 ('53)	61.9	65.7	48	('73)	70.70	76.02
29 ('54)	63.41	67.69	49	('74)	71.16	76.31
30* ('55)	63.60	67.75	50	('75)	71.76	76.95
31 ('56)	63.59	67.54	51	('76)	72.15	77.35
32 ('57)	63.24	67.60	52	('77)	72.69	77.95
33 ('58)	64.98	69.61				

資料：厚生省統計情報部「各年簡易生命表，完全生命表」

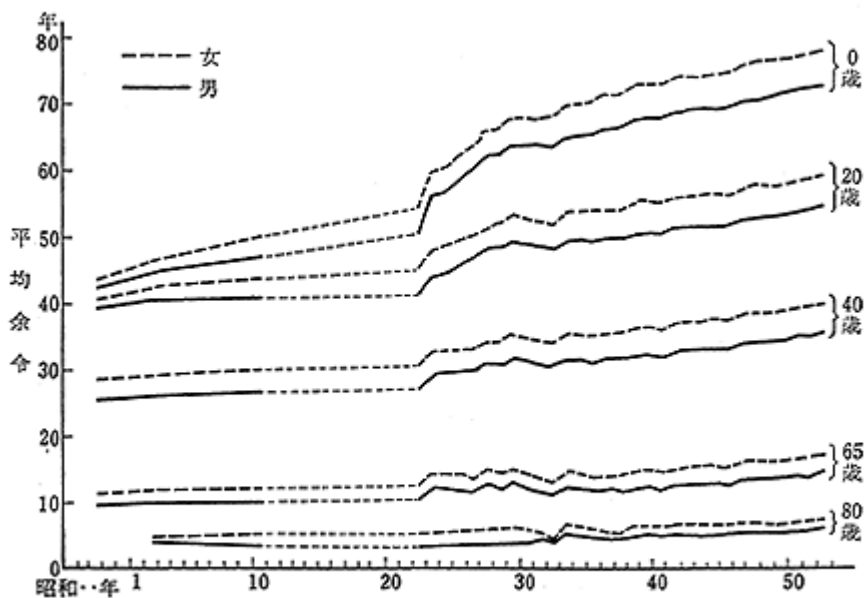
(注) *印は完全生命表

昭和47年以降は沖縄を含めた値である。

また、平均余命は、年齢が増加するに従って、その伸びの速度は緩やかとなり、65歳の平均余命では第6回生命表と、52年簡易生命表との差、すなわち約40年間の差は男子4.40年、女子5.36年、80歳では、男子1.81年、女子2.54年にしか過ぎない(第1-4図)。しかし、平均寿命の伸長からもうかがえるように高齢に達し得る確率は、非常に高くなっており、第6回生命表では65歳に達するもの(生存数)は10万人の出生に対して男子36,218人、女子43,550人であったものが、52年の簡易生命表では男子78,303人、女子87,394人とほぼ2倍強になっている(第1-5図)。

第1-4図 平均余命の年次推移

第1-4図 平均余命の年次推移

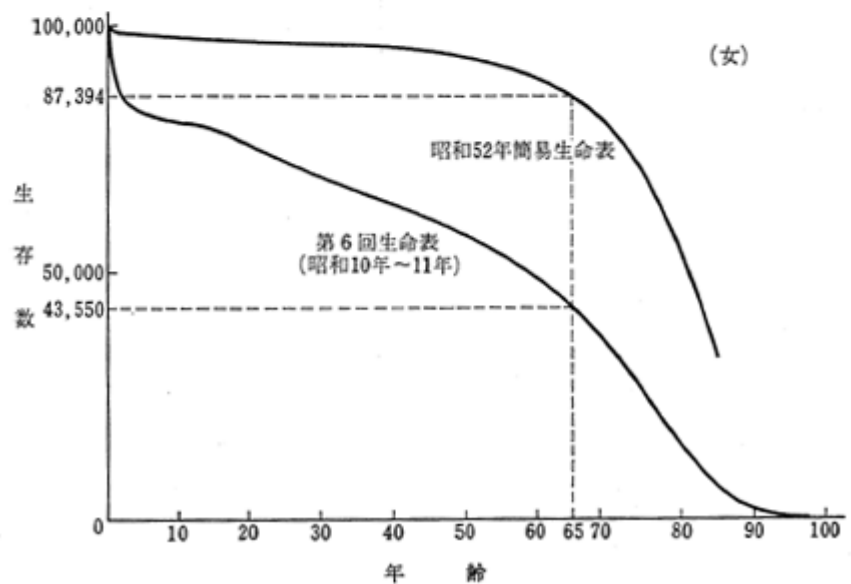
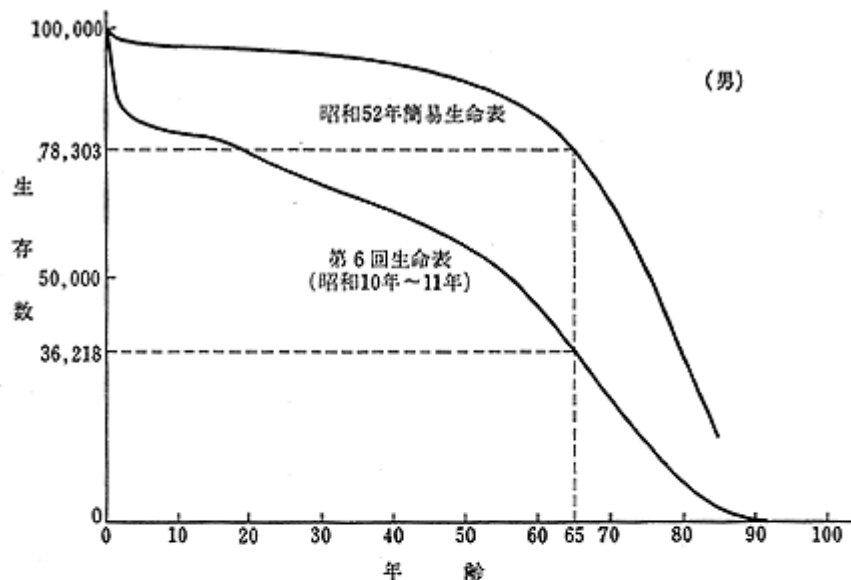


資料：厚生省統計情報部「各年簡易生命表，完全生命表」

(注) 昭和46年以前は沖縄を除く値である。

第1-5図 生存数の比較

第 1—5 図 生存数の比較



総論

第1章 世界の最高水準に達した我が国の平均寿命

第2節 我が国の平均寿命

2 死因構造の現状と推移

(1) 死亡原因の現状

52年の我が国の死亡者数は690,074人,死亡率は人口1,000対6.1であった。このうち「脳血管疾患」による死亡が170,029人で総死亡の24.6%,次いで「悪性新生物」が145,772人で21.1%,「心疾患」が103,564人で15.0%とこれら上位3死因で60.7%を占めている。この3大死因に「高血圧性疾患」,「老衰」,「良性及び性質不詳の新生物」を加えたいわゆる成人病は68.6%を占めるに至っている。

成人病による死亡以外で,最大の死因は第4位の「肺炎及び気管支炎」であるが,総死亡を占める割合は4.7%と各段に低くなり,「その他の細菌感染」による死亡を含めても7.4%にすぎない。第5位の死因は「不慮の事故」の4.4%であり,「自殺」,「その他の外因死」を含めての外因死は7.8%である。

特に「悪性新生物」は5~9歳で全死亡の15.2%,10~14歳で20.9%を占め,「不慮の事故」に続いて第2位の死因になっている。さらに30歳を過ぎると「悪性新生物」が最大死因となり,70歳以上では「脳血管疾患」が第1位となっている。

「悪性新生物」はいわゆる成人病に含まれて中高年以上の疾患のように思われがちであるが,1~4歳で第3位の死因となっており,若年でも上位を占めている。

また,総死亡において第3位となっている「心疾患」は,10~14歳で第5位,15~34歳で第4位の死因になっている。

すなわち,我が国の死亡原因を総体的にみた場合,乳児では先天的要因,それを過ぎると「不慮の事故」,「自殺」等の外因死と「悪性新生物」,中高年からは成人病が最大の死因といえる(第1-3表)。

第1-3表 年齢別にみた死因順位・死亡率・割合

第 1-3 表 年齢別にみた死因順位¹⁾・死亡率(人口10万対)・割合(%)

昭和52年(1977)

年 齢	総 数	第 1 位		第 2 位		第 3 位		第 4 位		第 5 位	
		死 因	死亡率 (割合)	死 因	死亡率 (割合)	死 因	死亡率 (割合)	死 因	死亡率 (割合)	死 因	死亡率 (割合)
総 数	608.0 (100.0)	脳血管疾患	149.8 (24.6)	悪性新生物	128.4 (21.1)	心疾患	91.2 (15.0)	肺炎及び気管支炎	28.6 (4.7)	不慮の事故	26.7 (4.4)
0 歳 ²⁾	892.6 (100.0)	先天異常	219.0 (24.5)	出生時損傷、難産 及びその他の無酸 素症、低酸素症	165.3 (18.5)	肺炎及び気管支炎	61.8 (6.9)	詳細不明の未熟児	54.6 (6.1)	その他の新生児の 異常	51.1 (5.7)
1 ~ 4	73.2 (100.0)	不慮の事故	30.5 (41.7)	先天異常	10.7 (14.6)	悪性新生物	6.6 (9.0)	肺炎及び気管支炎	5.1 (6.9)	他 殺	2.3 (3.1)
5 ~ 9	32.4 (100.0)	"	14.6 (45.2)	悪性新生物	4.9 (15.2)	先天異常	2.1 (6.6)	他 殺	1.4 (4.4)	肺炎及び気管支炎	1.4 (4.3)
10 ~ 14	21.2 (100.0)	"	5.1 (24.2)	"	4.4 (20.9)	中枢神経系の非炎 症性疾患	1.5 (7.3)	肺炎及び気管支炎	1.3 (6.0)	心疾患	1.1 (5.3)
15 ~ 19	52.2 (100.0)	"	22.8 (43.8)	自 殺	9.1 (17.5)	悪性新生物	5.4 (10.3)	心 疾 患	2.6 (4.9)	中枢神経系の非炎 症性疾患	2.3 (4.3)
20 ~ 24	71.0 (100.0)	"	21.3 (30.0)	"	20.1 (28.3)	"	7.0 (9.8)	"	4.3 (6.1)	"	2.2 (3.1)
25 ~ 29	77.0 (100.0)	自 殺	20.6 (26.7)	不慮の事故	15.8 (20.5)	"	11.9 (15.4)	"	5.7 (7.4)	脳血管疾患	2.2 (2.9)
30 ~ 34	92.4 (100.0)	悪性新生物	20.4 (22.1)	自 殺	18.4 (19.9)	不慮の事故	14.6 (15.8)	"	8.6 (9.3)	"	5.7 (6.1)
35 ~ 39	136.4 (100.0)	"	34.5 (25.3)	"	19.7 (14.5)	"	18.3 (13.4)	脳血管疾患	13.6 (9.9)	心 疾 患	13.1 (9.6)
40 ~ 44	217.6 (100.0)	"	60.6 (27.8)	脳血管疾患	29.7 (13.7)	心 疾 患	23.1 (10.6)	不慮の事故	22.0 (10.1)	自 殺	20.4 (9.4)
45 ~ 49	342.9 (100.0)	"	108.9 (31.8)	"	55.5 (16.2)	"	36.5 (10.7)	"	25.9 (7.5)	肝 硬 変	23.8 (7.0)
50 ~ 54	484.6 (100.0)	"	171.5 (35.4)	"	85.1 (17.5)	"	55.3 (11.4)	"	30.1 (6.2)	"	26.1 (5.4)
55 ~ 59	725.4 (100.0)	"	262.9 (36.2)	"	141.4 (19.5)	"	89.3 (12.3)	肝 硬 変	34.1 (4.7)	不慮の事故	32.2 (4.4)
60 ~ 64	1,204.9 (100.0)	"	420.7 (34.9)	"	271.8 (22.6)	"	159.7 (13.3)	"	41.6 (3.5)	"	39.5 (3.3)
65 ~ 69	2,043.4 (100.0)	"	616.9 (30.2)	"	533.5 (26.1)	"	297.5 (14.6)	肺炎及び気管支炎	69.0 (3.4)	"	52.9 (2.6)
70 ~ 74	3,584.1 (100.0)	脳血管疾患	1,073.4 (30.0)	悪性新生物	877.1 (24.5)	"	554.3 (15.5)	"	167.3 (4.7)	高血圧性疾患	97.0 (2.7)
75 ~ 79	6,209.7 (100.0)	"	1,995.6 (32.1)	"	1,118.6 (18.0)	"	1,061.6 (17.1)	"	365.4 (5.9)	"	233.8 (3.8)
80 ~	13,208.3 (100.0)	"	3,879.5 (29.4)	心 疾 患	2,621.9 (19.9)	老 衰	1,706.0 (12.9)	悪性新生物	1,124.0 (8.5)	肺炎及び気管支炎	977.8 (7.4)
(再掲) 65 ~	4,843.4 (100.0)	"	1,435.2 (29.6)	悪性新生物	856.8 (17.7)	心 疾 患	842.9 (17.4)	老 衰	297.2 (6.1)	"	281.2 (5.8)

資料：厚生省統計情報部「人口動態統計」 1) 死因順位は死亡者数の多いものから定めた。従って死亡率、死亡割合が同数の死因であっても異なる場合は死亡者数の多い死因を優先した。死亡率が同数の場合は、同一順位に死因名を列記した。2) 乳児の死因については、乳児簡単分類(P分類)を使用した。

総論

第1章 世界の最高水準に達した我が国の平均寿命

第2節 我が国の平均寿命

2 死因構造の現状と推移

(2) 死因の年次推移

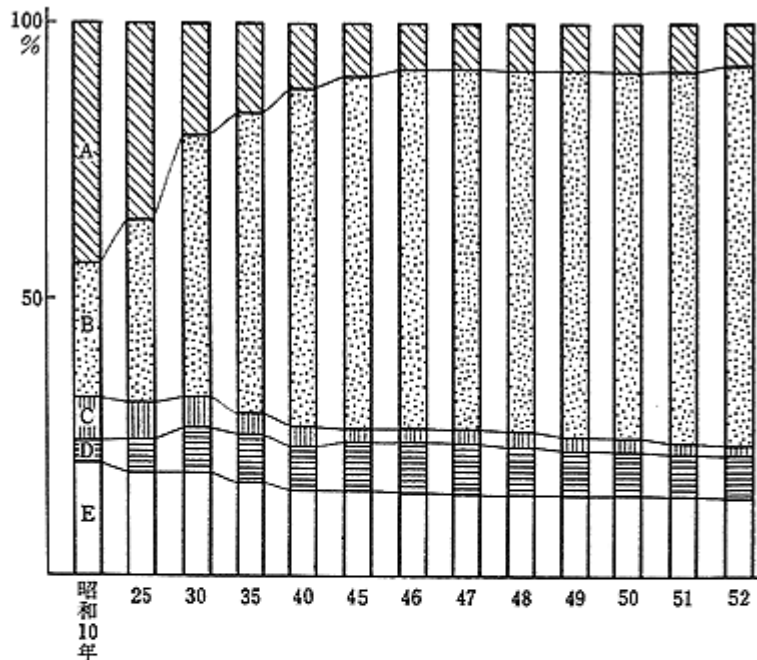
戦前、平均寿命の短かった頃の最大の死因は細菌感染によるもので、この死因は総死亡の43.4%(昭和10年)にも及んでおり「全結核」、「肺炎及び気管支炎」、「胃腸炎」が三大死因であった。とくに結核による死亡は20歳前後に集中して、この年齢層の死亡率は、前後の年齢層よりかなり高く、第6回生命表によると、1%前後になっていた。

戦後伝染性疾患による死亡は急速に減り、26年には「全結核」は「脳血管疾患」と入れ替って第2位の死因となり、翌々年の28年には第5位に落ち、替って「悪性新生物」が筆2位にあがっている。

30年になると、感染性疾患による死亡(伝染病、寄生虫病、インフルエンザ、肺炎、気管支炎、胃腸炎等)は、総死亡の20.4%と、戦前のほぼ2分の1の率となり、代わって戦前に24.7%(昭和10年)であった成人病による死亡が47.2%となって、両者の割合はちょうど逆転している(第1-6図)。

第1-6図 死因群別死亡割合の年次推移

第1-6図 死因群別死亡割合の年次推移



A部 細菌感染によるもの	B部 成人病	C部 妊産婦および乳児期の疾患
伝染病および寄生虫病 髄膜炎 インフルエンザ 肺炎および気管支炎 胃腸炎	悪性新生物 良性および性質不詳の新生物 心疾患 高血圧性疾患 脳血管疾患 精神病の記載のない老衰	妊娠、分娩および産褥の合併症 先天異常 出生時損傷、難産およびその他の無酸素症、低酸素症 その他の围産期の死因
D部 外因死	E部 その他	
不慮の事故 自殺 その他の外因	A, B, C, D 群以外の全死因	

資料：厚生省統計情報部「人口動態統計」

注) 昭和10年のB群には高血圧症は含まない。

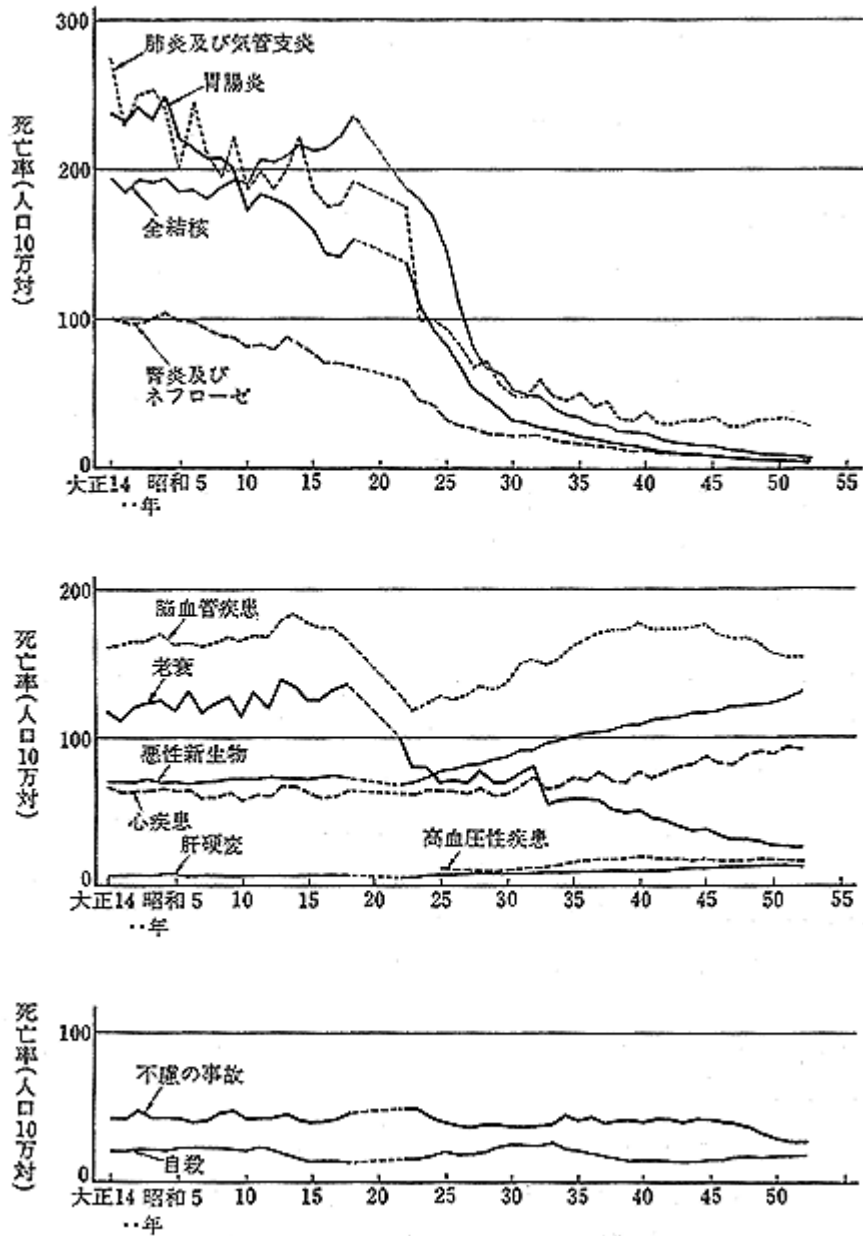
また、20歳前後にみられた死亡率の山は消滅し、「全結核」は第10位の死因におち、最近では、結核による死亡はむしろ高齢者に多くなっている。戦前人口10万対200を超えていたその死亡率は、52年には78となり、十大死因からはずれた。

また、30年前後では、第3位の死因であった「老衰」は、その後33年に「心疾患」と、43年に「不慮の事故」と入れ替り、48年にはさらに「肺炎及び気管支炎」と入れ替って、現在は第6位の死因となっているが、医学の進歩により他の死因名が課せられることによって死因順位が低下している事実には注意する必要がある。

現在第9位と順位は低い、「肝硬変」の死亡率は、30年頃からジリジリ増大しており、30年に人口10万対8.6であったものが、52年には13.6となっている。とくに、45~54歳では第5位の死因になっており、今後の動向に注意を要する疾患である(第1-7図)。

第1-7図 主要死因別死亡率の推移

第 1-7 図 主要死因別死亡率の推移



資料：厚生省統計情報部「人口動態統計」

総論

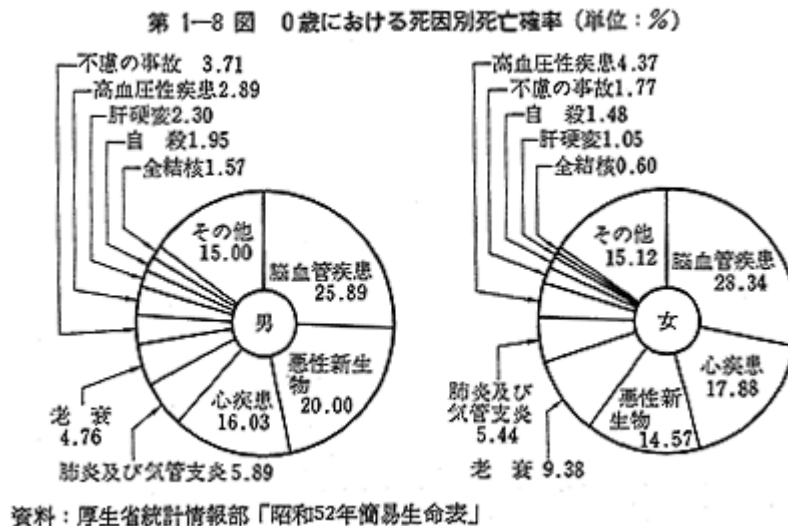
第1章 世界の最高水準に達した我が国の平均寿命

第2節 我が国の平均寿命

3 主要死因の平均寿命への影響

ある年齢の生存者が、その後特定の死因で死亡する確率を死亡の状況がかわらぬと仮定してその死因の大きさの程度を示したものが死因別死亡確率である。52年の死亡状況からみると、0歳の男子では、その25.89%が将来「脳血管疾患」で死亡するものと見込まれ、次いで「悪性新生物」、「心疾患」と続き、三大死因で61.92%となる。0歳の女子では、3死因合わせて60.79%とほぼ男子と同率であるが、「脳血管疾患」、「心疾患」が高く、「悪性新生物」は第3位となり、死亡割合の順位とも異なっている(第1-8図)。

第1-8図 0歳における死因別死亡確率



また、男子では相対的に「不慮の事故」が多く「老衰」が少ないなど、女子とはかなり異なった構造となっている。

年齢が高くなると、その後の死因として「脳血管疾患」「心疾患」「老衰」など高齢者に多い疾患の比重が高くなるのは当然であるが、「悪性新生物」は、高齢者での比重は低下している。

いま、ある死因が全くなくなると仮定し、その死因で死亡していた者が、その年齢で死なずに、何年か後に、その年次の死亡状況に従って、他の死因で死亡するものとして、平均余命の伸びを算出したものが、「特定死因を除去した場合の平均余命の伸び」である。いいかえれば、その死因のために失った余命年数であり、その死因の生命への影響力の大きさを示すものである。

52年の状況を見ると、平均寿命への影響力は、男女ともやはり「脳血管疾患」が最大であり、この死因のため、男子では2.94年・女子では3.19年、平均寿命が短縮したことになる。また「悪性新生物」の平均寿命への影響力もかなり大きく、男子では「脳血管疾患」に迫っており、女子では「心疾患」を上回っている。

各年齢の特定死因を除いた平均余命の伸びをみると、「不慮の事故」、「自殺」以外では、40歳まで、ほぼ0歳

の特定死因を除いた平均余命と同じ値となっており、これらの死因は中高年以前の死亡状況に余り影響を与えていない(第1-4表)。

第1-4表 特定死因を除去した場合の平均余命の伸び

第1-4表 特定死因を除去した場合の平均余命の伸び

		(単位：年)			
男		0 歳	20 歳	40 歳	65 歳
死 因					
全 結 核		0.19	0.19	0.19	0.12
悪 性 新 生 物		2.82	2.79	2.71	1.70
高 血 圧 性 疾 患		0.23	0.23	0.23	0.23
心 疾 患		1.73	1.73	1.68	1.42
脳 血 管 疾 患		2.94	2.99	2.99	2.64
肺 炎・気 管 支 炎		0.54	0.48	0.47	0.48
肝 硬 変		0.38	0.38	0.36	0.13
不 慮 の 事 故		1.01	0.67	0.41	0.15
(再掲) 自 動 車 事 故		0.43	0.28	0.15	0.04
自 殺		0.50	0.46	0.24	0.07
女					
死 因		0 歳	20 歳	40 歳	65 歳
全 結 核		0.08	0.09	0.08	0.05
悪 性 新 生 物		2.32	2.30	2.13	1.20
高 血 圧 性 疾 患		0.34	0.35	0.35	0.36
心 疾 患		1.83	1.84	1.81	1.68
脳 血 管 疾 患		3.19	3.23	3.23	3.01
肺 炎・気 管 支 炎		0.51	0.46	0.44	0.43
肝 硬 変		0.14	0.15	0.14	0.08
不 慮 の 事 故		0.37	0.22	0.17	0.11
(再掲) 自 動 車 事 故		0.14	0.09	0.06	0.03
自 殺		0.33	0.32	0.19	0.09

資料：厚生省統計情報部「昭和52年簡易生命表」